【63】

氏　名（国籍）	王（おう）　盈（えい）文（ぶん）（台　湾）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　4203　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**初期太宰文学の〈日本帝国〉表象** －よみがえる明治の記憶とイメージの外地－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	宮　本　陽一郎
副　査	筑波大学助教授		加　藤　百　合
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	吉　原　ゆかり
副　査	筑波大学講師	博士（文学）	齋　藤　　一

論文の内容の要旨

本論文の目的は，太宰治の初期作品と同時代の日本帝国の内外の情勢との係わりを考察し，太宰文学が表象している満州事変後の日本帝国の姿を浮き彫りにすることである。

本論文の構成は，以下の通り。

序章
第 1 章　1896 年のロンドン博物館附属動物園の猿たち
　　—「猿ケ島」にみる日本（人）表象 —
第 2 章　剽窃と著作権
　　—「ダス・ゲマイネ」の表象した満州事変後の文化情勢 —
第 3 章　新旧世界観と近代日本
　　—「地球図」にみる〈非常時〉の世相 —
第 4 章　知識階級の就職難と満州
　　—「盗賊（コント）」にみる昭和初期の経済恐慌 —
第 5 章　少年の観察した〈くろんぼ〉
　　—「逆行」における 1920-30 年代の「南」表象 —
第 6 章　兵士〈太宰治〉・ナポレオン・博覧会
　　—「狂言の神」の表象した「南進論」の日本 —
結章

本論文を大きく分けると，第 1 章から第 3 章までと第 4 章から第 6 章までにわかれ，前者は明治以来の日本の発展に係わり，後者は満州や「南洋」，そして台湾という帝国の外地に係わっている。

第 1 章は，「猿ヶ島」（1935 年 9 月）を対象として，話の舞台が「ロンドン博物館附属動物園」とされて

いることに着目し，日本と欧米の動物概念の差異を確認したのち，実在しない「ロンドン博物館附属動物園」となっている名称の由来とその意味を追究し，さらに幕末・明治以降，欧米でなされた日本人表象，とりわけ「猿」と「黄色」の意味を検証して，この作品が明治と昭和の二重書きがなされていることを指摘している。

第2章は，「ダス・ゲマイネ」（1935年10月）を対象とし，登場人物の馬場が「荒城の月」の作曲者・滝廉太郎を名のったり，プラーゲ旋風の話をしたりする行動を「剽窃」との視点から考察し，西洋文化を積極的に吸収してきた近代日本が，昭和初期の難局の打開策として，自国文化の輸出へと方向転換した事態を読みとっている。

第3章は，「地球図」（1935年12月）を対象として，これが18世紀初頭の新井白石『西洋紀聞』の翻案であると確認したあと，洋学の起源である『西洋紀聞』の評価と明治以降の西洋化政策との関連を検証し，「地球図」の創作背景として，昭和初期の明治維新ブームとの関係を追究し，満州国建設との関係を読みとっている。

第4章は，「盗賊」（1935年10月）を対象として，経済恐慌による就職難に苦しんでいた大学生の満州への関心を分析し，満州事変後の軍事景気と満州国建設にともなう官吏需要拡大政策により，大学生はインテリの新天地とされた満州に興味津々であったことを明らかにし，大学生の就職活動と日本帝国の海外進出との関係性を明示している。

第5章は，「くろんぼ」（1935年2月）を対象として，サーカスの日本チャリネが連れてきたと思われる「南洋」出身の「くろんぼ」の少女をめぐる主人公の少年の考えを分析し，1920年代から30年代にかけての日本に生成された「南」表象を追究している。

第6章は，「狂言の神」（1936年10月）を対象として，そこに描かれた横浜本牧の娼婦「ナポレオン」の名の意味を追究し，そこから1930年代に外地で開催された博覧会の問題や，台湾から中継されたラジオ放送の実際を検証し，南洋諸島が日本の委任統治領になってから，どのように植民地台湾の役割が変化し，また，「南進論」がどのように変容していったかを考察している。

審査の結果の要旨

従来の太宰文学研究は，太宰の自伝的事実を重視し，その観点から分析・解釈しようとして，作品の同時代状況を軽視する傾向にあった。それは太宰自身にも責任があった。自らが起こした事件や騒動を題材にし，「太宰治」という登場人物を設定していたからである。こうした傾向は，すでに同時代評にもみられた。

そうした先行論にたいして本論文は，1930年代の日本帝国をめぐる多様な状況を表象している資料（新聞・雑誌・ラジオ放送・政府機関および民間団体の報告書など）をもとに，太宰治の初期作品を分析し，初期太宰文学がいかに同時代状況と結びついていたかを論証し，新境地を切り開いたものである。

たとえば，著者は，従来の研究が，青森と東京で活動した太宰を，外地や植民地と係わりのない「内地」の作家としてきたことを批判し，太宰には外地・植民地の経験をもつ友人が少なくなかったことに注目している。太宰の友人には，大正初期に台湾旅行をした佐藤春夫，台北で高校教育を受けた中村地平，『満州浪漫』の中心者・北村謙次郎などがいたことを指摘し，太宰は内地にいても，こうした友人や新聞やラジオなどのマスメディアから外地の情報は容易に入手しえた状況にあったといい，内地も外地も日本帝国の領域であるという観点を強調している。従来の太宰研究が，主として内地に観点をすえ，近年成長著しい植民地文学研究が，もっぱら外地に注目することを考えれば，本論文の位置とその主張の正当性がわかる。

本論文が明らかにした成果は三つにまとめられる。第一は，太宰の初期文学が，明治と昭和のふたつの時代を同一テキストで扱っていることに見られるように，太宰にとって，「明治」は過ぎ去った時代ではなく，繰り返し回顧され，新しい意味づけのなされるべき重要な課題であったことを指摘したこと，第二は，満州

事変後の日本外交や，昭和初期の大学生の就職難や満州景気などが言及されていることからもわかるように，太宰が同時代の経済・政治・文化を積極的に表象していることを追究しえたこと，そして第三は，帝国日本の内地が，いかに「外地」のイメージを形成したかを具体的に検証し，太宰が，外地と内地のひとや情報の流通に精通していたことを示唆できたことである。

とはいえ，本論文の成果は，こうした新しい観点の発見と呈示にだけあるのではない。本論文の最大の特色は，テキストにあって無視にちかい扱いをうけていた記号に着目し，そこに可能体として存在している膨大な同時代的資料を示し，そこから適切なものを切り取ってきたその調査力と読解力と感性にある。本論文で問題にされた具体的な事象は，今後，他の分野でも有用なものと認識されることになろう。

こうしたすぐれた本論文であるが，望まれることがないわけではない。それは，従来の研究の批判が徹底的になされていない印象を受けるからである。しかし，それも著者自身の責任ではないかも知れない。先行論文自体が少ないこと，あっても十分な研究対象となってこなかったという事実があるためである。逆に，そうした乏しい研究にたいして，著者には，新境地を開拓する旺盛な意気込みがあったことを高く評価すべきであろう。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。